小学校高学年以上

コタロー日記

大坪かず子・作　今井弓子・画

913

コタロー日記

大坪かず子 作　今井弓子 画

東京　小学館　　昭59 (1984)

142P　22cm

(小学館の創作児童文学シリーズ 45)

コタロー日記　定価・八八〇円
一九八四年十二月一〇日　初版第一刷発行

著者・大坪かず子
画家・今井弓子
発行者・相賀徹夫
発行所・株式会社　小学館（〒一〇一）
東京都千代田区一ツ橋二ノ三ノ一
電話・東京〇三(二三〇)五五四一(編集)
五三三三(業務)　五七三九(販売)
振替・東京八―二〇〇
印刷所・図書印刷株式会社

＊製本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁、乱丁などの不良品がございましたら、おとりかえします。
＊本書の内容の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合は予め小社あて許諾を求めてください。

©1984 SHOGAKUKAN・Printed in Japan ISBN4-09-289045-1

ロー日記

大坪かず子　作　今井弓子　画

装幀デザイン　中野博之

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1 春ランマン 8
2 ギターと木刀 25
3 ショナラさま 47
4 やったね！ 67
5 よそはよそ、うちはうち 85

6　通学路やぶり　105

7　しあわせ新聞　126

あとがき　142

大坪かず子（おおつぼ　かずこ）
一九三三年、長野県に生まれる。松本蟻ヶ崎高校卒。短篇童話集「赤鼻のモク」（長野県児童文学推薦図書）「おしゅん」（昭和五十三年度日本童話会賞受賞）「コタロー日記」（昭和五十八年度日本童話会賞受賞）「木になりたい」（信濃毎日新聞夕刊連載童話）。その他の作品「ユングイの笛」「砂塵の中から」など。日本童話会・信州児童文学会・日本児童文学者協会・以上会員。
現住所／長野県松本市宮渕二―七―三五

今井弓子（いまい　ゆみこ）
東京都に生まれる。いろいろな職業につきながら、独学で絵を勉強。一九七一年から児童図書の世界にはいる。七六年、第一回個展「ひとたち」を開く。以後「ひとたち」を描きつづけている。主な作品に「あめたろう」「たたく」「ママのまえかけ」「南風のゴンゴ」「ブタがピラをくばるとき」などがある。
現住所／東京都渋谷区千駄ヶ谷一―三〇―二
グランツハイム千駄ヶ谷三〇三号

コタロー日記

大坪かず子　作
今井弓子　画

1　春ランマン

二月五日

おきてみたら、雪が五センチつもっていた。

今日は、寒休みの最後の日だ。長野県の松本は、一月の終わりから二月の初めにかけて、ものすごく寒くなる。レイ下十三度とか十四度になるのはざらだから、学校は休みにする。それが寒休み。

レイ下十三度や十四度というのは、どのくらいの寒さかというと、ぬれた手ぬぐいをぶらさげて外に出て、持ったまま上にむけると、手ぬぐいが棒でも立てたように、こちこちに氷って立っているといった状態である。

そうなると、家の軒から、つららが五十センチもの長さになってさがる。それを折って手に持つと、てごろな短剣になる。そのつららの剣で、ぼくたちはチャンバラごっこをする。

これはほらでも誇張でもない。ほんとうのことだ。

まちにまっていた寒休みだったが、今年はスキーにも、

スケートにも、つれていってもらえなかった。急に用事ができて、いかれなくなったのではなく、去年からそうきめてあったことだから、しかたがない。というのは、わが家には受験生が三人もいるからである。

受験生が三人もいるというと、知らない人は、

「えっ、きみんち、下宿屋さん？」

と、聞く。学生あいての下宿屋でもやっていると思うらしいが、ぼくのうちは下宿屋ではない。三人の受験生とは、ぼくの兄きたちのことなのだ。

おっき兄ちゃんことダイタローは二浪。（二浪とは、二年間浪人している人のこと。つまり、大学受験に二回失敗した人のことをいう。）

アビ姉ちゃんことアサヒは、初めての大学受験。ちっちゃ兄ちゃんことタローは高校受験で、あぶないぞ、落ちるぞといわれながらも、あこがれのF高校目ざしてまっしぐら。こういう生徒を、中学の先生たちは、ジバクカクゴのトッコウタイとよんでいるそうだ。

こんなぐあいに、家庭の中がややこしくなっているので、スキーどころか、テレビもろくろく見せてもらえなかった。柄にもなく、むずかしい学校ばかり、えらんで受けるので、こういうことになる。もっと自分の実力を知るべきだと思うのだが、こんなことを、末っ子のぼくがいうと、生いきだって頭をひっぱたかれるにきまっているから、ぼくは沈黙している。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ドアをパタンとしめてもいけないし、椅子をギイギイさせてもいけない。歌をうたってもいけないというので、この六日間、ぼくは自分の部屋にとじこもって、カセットテープにふきこんだコモリナツナちゃんの歌を、聞いてすごした。もちろんヘッドホーンを耳にくっつけてだ。もし、ぼくが難聴になったら、それはすべて兄きたちのせいである。

いよいよ、その休みも今日で終わりとなると、やはり、未練が残る。ぼくは、今日一日で六日分をとりもどせるような、すばらしいことをしようと考えた。歯をみがいているときも考え、朝ご飯を食べているあいだも、ずっと考えていたのに、よい考えがうかばない。考えているだけで一日が終わってしまいそうで、いらいらしていたら、木山くんから電話がかかってきた。

「プラモデルのコンテストやってるの、知ってる？」

「知らねえ、どこで？」

「文化会館だって。いってみねえ？（みないか）」

「もっと前に知ってたら、いいやつ、作ってだしたにな。」

「まだ、しめきってねえかもしれねえで、いってみれや（みようよ）。」

「うん、じゃあ、今いくで……。」

「タバコ屋の前で、まってるで……。」

ぼくは、大急ぎでヘルメットをかぶって、自転車にまたがった。
文化会館の前は、人でわんわんしていた。小学生ばかりでなく、中学生も高校生も、いい年のおじさんまでが、できあがった自慢のダグラムやマクロスを、大事そうにだいている。
「わあ、たんとの人だあ！」
「もう、しめきっちまっつらか？（しめきってしまったろうか）」
「ぼく、聞いてくるで。」
「ぼくもいく。」
こんなにおおぜいだと、入賞するのは大変だなと思いながら、ぼくたちは人ごみをかきわけて、会館の中へ入っていった。主催者は、顔なじみの中央堂のおじさんだった。おじさんのまわりには審査員と書いたふだを胸にぶらさげたおじさんたちが、五人いた。
ぼくは中央堂のおじさんに、
「おじさん、もうだめですか？」
「ああ、ぼくたちか……まだいいよ。できたのあったら、もっといで。」
ぼくたちは、自転車をもうスピードでこいで、家までとりにかえった。
木山くんは、高さ三十センチぐらいのイデオンを、ぼくは、ガンダムとアッガイとゾックを

だした。三つとも十五センチと小型だが、戦いつかれて色あせてしまったようにぬってあって、なかなかのできだとうぬぼれているんだ。このぼくの色の感覚、審査員のおじさんたち、わかってくれるかなあ……。

発表は午後の一時だというので、みんなひきあげていったが、ぼくと木山くんは残ることにした。近くのパン屋で、カレーパンとジュースを買ってきて、文化会館のとなりの四柱神社のベンチで食べながら、発表をまとうということになったのである。

日があたっているところの雪は、とっくに消えていたが、植えこみの根っこや建物や塀のかげには、まだぶあつく残って氷っていた。

かじかんだ手に息をふきかけながら、パンをかじっていると、たくさんのハトが集まってきた。うじょうじょと寄ってきて、ベンチや、ひざや、肩にとまる。二羽とか三羽ぐらいなら、かわいいんだろうが、こうたくさんだと、鳥が人をおそって、次つぎに殺してしまう映画を思いだして、うすきみわるくなる。

トテッコッコォ

びっくりして、空を見あげたら、ニワトリが一羽、松の木のてっぺんで、ときの声をあげているのだった。羽が金茶のチャボだ。

トテッコッコッコォ

13　春ランマン

松の木のならびの杉の木の枝にも、おんどりがとまっている。
「見て、見てぇ！　ニワトリが木のてっぺんにいるう!?」
「ああ、ここのニワトリ、いつもああだよ。」
木山くんは、少しもおどろかない。よく見ると、あっちの木にも、こっちの木にも、ニワトリがとまっているのだった。
バタ、バタ、バッタ、バッタ
杉の木のめんどりが、大きな羽をはばたかせて、高い石の鳥居の上にとびうつった。
バタバタバタ、バタバタ
つづいてもう一羽が、松の木の上をせんかいして、となりの枝にとまった。
ぼくは、もう口あんぐり。なにしろ、ニワトリが空をとぶところを、生まれてはじめて、この目で見たのだから……。このお宮では、ハトが地面を歩いて餌をあさり、ニワトリが木のてっぺんでウンコをしているんだ。
ぼんやり空をながめているまに、ハトたちにパンを半分も食べられてしまった。

いよいよ、発表。
「やったね！」

ぼくは、立川賞とかで、金色のワシのついた小さなタテと、新しいプラモデルを二つもらった。木山くんは、賞には入らなかったけれど、参加賞として、プラモデルを一つもらった。金賞と銀賞の二つを、高校生と中学生にさらわれたのはしゃくだったが、プラモデルはもらえたし、ニワトリの空の飛行も見たし、寒休みの最後の日だけは、まあまあだった。

二月十三日

あしたは、バレンタインデー。チョコレートがいくつくるだろうか？

「あいつとあいつと、あいつとあいつは、確実な線だな。」

「えっ？　コタローは、女の子からチョコレートもらうだあ？　もててるう！」

「おれたちの弟とは、とっても思えねえなあ……。」

これは、うちのおっき兄ちゃんとちっちゃ兄ちゃんの言葉。二人とも、いままでに一度も、女の子からチョコレートもらったことないんだって。

「おくれてるう!?」

ぼくなんて、幼稚園のときから五年生になるまで、もらいつづけているっていうのに……それもハート型のをだよ。よほど、うちのお兄ちゃんたちは、女性にもてないようにできているらしい。ぼくのように、もてすぎてもこまるが、兄きたちのように、まるっきりもてないのも、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com